

## ヒチコツクの名作「鳥」と牛肉一辺倒のスリラーもどき

スリラー映画の名手としてわが国にもフアンも多いヒチコツクは、知る人ぞ知るトリ肉がらひ。その嫌悪と恐怖心を悪夢のように結晶させた「鳥」は、正直、見る者の身の毛をよだたせた。

そのクライマックスシーンで、町の人々は空が真つ暗になるくらいのカラスの大群に襲われる。ある者は恐怖で顔をひきつらせ、ある者は血を流しながらレストランに逃げ込むと、そのレストランのテーブルには食べかけの料理の皿がいくつも残っていて、それがことごとくトリ料理という徹底ぶり。ヒチコツクが心底トリ肉を恐れていたことが、いやでもわかる映像の重ね押しである。

というのも、ヒチコツクは、トリ肉屋のせがれに生まれた。毎日、トリたちがしめ殺されるのを見て育つうち、心の奥にえもいわれぬ恐怖が育つたらしい。

それを、ちりちりちりと他の映画でも取り出してみせるのだが、「断崖」という映画では、目玉焼きの真ん中にジュウツと火のついたたばこをねじ込んでみせたり、「汚名」ではわざと主人公を話に夢中にさせて、オーブンに入れたトリ料理を黒焦げにさせてみせたりする。また「知り過ぎた男」という作品では、市場で後ろからナイフで刺された



男が、毛をむしられたニワトリが林のようにぶら下がっているところへ倒れ込むシーンを見せ、タイトルは忘れたが、二人の男のけんかのシーンで、台所にいた男が「馬鹿野郎」とかなんとか叫びながら廊下にいた男に持つていたタマゴを投げつけると、そのタマゴが窓ガラスに当たって黄味がぬったりとガラスを伝わって流れ落ちる。それをカメラは入念に見せながら、血よりも不気味なフィードリングを画面いっぱいに拡げてくれる。

トリ肉にたいするヒチコックの恐怖心を  
いっそう深めたのは母親で、彼女は彼のチキ  
ン嫌いを直そうと、毎日毎日、チキン料理で  
ヒチコックを攻めたてたといわれる。

ヒチコックは、日本での「鳥」の公開にあ  
たって、パラマウント映画日本支社の招きで  
来日した。そのさい宿舎の帝国ホテルでは、  
来る日も来る日も、朝、昼、晩と、欠かさず  
特大のステーキを食べ続けたといわれる。そ  
れも真つ赤な血のしたたる「ベリーレア」と  
いうやつだったという。